

## 南蛮屏風に描かれる図様の成立と主題についての考察

## — 日明貿易に関わる儀礼を通して —

みき さゆり

三木 沙友理 (滋賀県立大学)

## 発表要旨

9  
時  
20  
分  
—  
10  
時

松ヶ崎・西キャンパス内センターホール

南蛮屏風は16世紀中頃から制作が始まったと考えられており、現在90以上の作品がある。それらの作品を通覧すると、多くの屏風に共通する図様として以下の4つがあることが浮かび上がる。それは、①カピタンが率いる南蛮人の行列 ②その行列を出迎える宣教師たち ③南蛮船 ④南蛮寺である。しかしこれらの図様の相互の関係を明示するような表現は画面上には見られない。例えば、宣教師たちがカピタンを出迎えている理由や、その宣教師たちと背後の南蛮寺の関連を示すような表現はない。これら4つの図様は南蛮屏風に繰り返し登場するが、先行研究ではこれらの図様がなぜ南蛮屏風に共通して描かれるのかについては言及されてこなかった。

泉万里氏は南蛮屏風の前身として「唐船図」や「唐人行列図」があることを指摘した。それらは15世紀の文献には少なからず記されるが、現存せず図柄は不明であり、南蛮屏風との関連性も明確ではない。そこで発表者は、これらの絵が日明貿易に関わって制作されたことを更に掘り下げて考察した。日明貿易は、室町将軍が日本国王として明皇帝の下に冊封されるという枠組みの中で行われる朝貢貿易である。そうであるならばこれらの絵は、冊封の儀礼のために日本を訪れた明使をモチーフとして描いたものと考えられよう。明が蕃国を冊封する際に行う儀礼について『大明集礼』の「蕃国接詔儀注」で確認した結果、南蛮屏風の4つの図様に冊封の儀礼と共通する部分があることが見出せた。つまり、日明貿易における冊封の儀礼の様子が、「唐船図」や「唐人行列図」など日明貿易に関わる絵の着想源となり、それらの図様が南蛮屏風に継承された可能性がある。

「唐船図」や「唐人行列図」がこのように成立したと仮定するならば、これらの図様の主題について従来とは異なる解釈が必要となろう。従来それらは、日明貿易による巨万の富の到来を喜ぶ招福主題と考えられてきた。確かに、日明貿易による利益は莫大なものであり、これらの絵が富の到来を喜ぶものとして受容された可能性は高い。しかし、室町幕府など当時の日本の支配者層は「外交をしないことで中国と対等の立場を保ち、朝鮮を自らより下位に位置付ける」という対外秩序観を持っていた。すなわち冊封されることは当時の日本の支配者層にとって屈辱的なことであった。そうであるならば、これらの絵が彼らに受け入れられたのは、絵に描かれた明からの使節を「日本を臣下として冊封する使節」ではなく、「日本へ朝貢に来た使節」であるかのように受容していたからではないだろうか。つまり、これらの絵は職貢図的な意味をも持っていた可能性がある。

南蛮屏風は「唐船図」「唐人行列図」を前身とする絵だと考えられる。そうであるならば、それらが招福と職貢という二つの意味で受容されていたのと同様に、南蛮屏風も職貢図的な意味をも持つ絵であったことを指摘できるのではないだろうか。